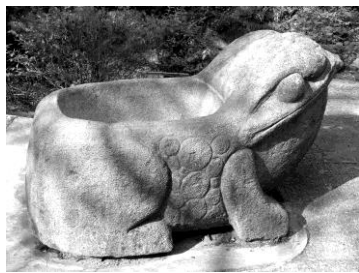


鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ (27)

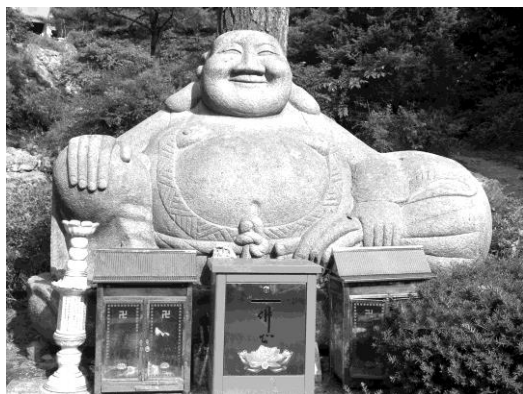
前橋市 富山 弘毅

チョンウンサに金福酒

原州(ウォンジュ)郊外の山の懐にあるチョンウンサ(漢字不詳)という寺もちょうちんで飾られ、門前の橋のたもとで蛙石1つ、虎石2つと、布袋様に似たおなかの大きな石像「金福酒(クムボクジュ)」がユーモアたっぷりに迎えてくれました。



(下) 金福酒
(左) 蛙石
原州・チョンウンサ参道



(下) チョンウンサ 大雄殿 鬼
(左) チョンウンサ 大雄殿 龍と鬼



日本で飲める韓国の焼酎のうち、「眞露(ジンロ)」はソウルを中心とした京畿道のお酒、「鏡月(キョンウォル)」は江原道、「金福酒(クムボクジュ)」は慶尚道、「舞鶴(ムハク)」は全羅道のお酒だといえます。金福酒という銘柄は、1984年の商標出願なので古い酒ではないようですが、名前はこの石像に由来するものかもしれません。

大雄殿に鬼瓦がありました。比較的新しく感じられるものと、古色蒼然としたものと。同じデザインです。長く伸びたひげが特徴的で、日本には類例がありません。

全体として龍が圧倒する中で、極楽殿の望瓦の中に鳳凰がめだちました。韓国では龍だけでなく、動的に鳥をデザインした瓦がいくつもあります。



チョンウンサ 極楽殿 鳳凰

日本の隅瓦、軒丸瓦にも雀、鶴などの鳥や揚羽蝶などがありますが、ほとんどが静的にきっちり紋様化されています。日本の鬼瓦のうち龍だけはきわめて動的で、これまでいくつも紹介したように、数十センチ角の狭いところに押し込められながらも、そこから飛び出していきそうな勢いを示しています。龍以外では、大津市の願海寺にある、笹に鳩をあしらった四角の鬼瓦の鳩が動的で、とても珍しいものです。



滋賀県大津市 願海寺本堂
鬼瓦 笹に鳩

極楽殿には「三ツ輪」マークの軒先瓦がありました。日本の商品にもあります。

この極楽殿に色鮮やかなヘッテの仏画があり、また寺の参道に棒を抱いたトッケビの石造2体が立っていたことは、先述しました。韓国の大寺には「ここだけにしかない」という特異なものが、必ず何かあって、大切にされているように思えます。

軍人の寺・法雄寺 ポブンサ

原州の市街地に戻り、夕暮れが迫る中で訪れたのが 1971 年に建てられた軍人の寺・法雄寺

(ポブンサ)です。ここも龍だらけで、大寂光殿の扉の蝶つがいの金具にまで、龍がデザインされていました。



法雄寺 大寂光殿 扉 蝶つがい 龍

龍頭瓦は韓国流だけでなく中国風もあったのは、珍しい感じでした。

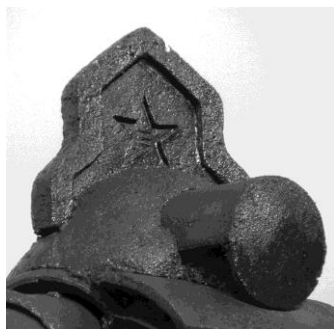


法雄寺 大寂光殿 中国風龍頭瓦

大寂光殿の龍の絵の中に、舌を出しているものがあり（写真・下）、珍しく感じました。日本の鬼瓦の中にも、ごく稀にベロ出し鬼があります。ニュージーランド旅行をしたとき、先住民のマウイ族がベロを思いっきり出して、これが相手を威嚇する形相なのだと教えてくれたのを思い出します。共通する形相かもしれません。



望瓦の中に異型のものがありました。(右) 星の文様は軍人の寺を象徴しているかのようでした。



ソバ は はさみで切って

午後 6 時を回っていました。法雄寺のすぐ隣のそば屋に入りました。ギョウザ風のマントウと冷たいそばを注文しました。

冷しそばにはコチュジャン（辛みそ）がコッテリ載せられていましたが、通訳のユンさんが半分くらい取り除いてくれたおかげで、おいしく食べられました。日本そばと同じように長い麺ですが、はさみをどんぶりに突っ込んでジョキジョキ切って、スプーンでも食べられるように短くします。ズルズルッと音を立ててすすむようなことにはならないのが、隣の国の食文化のようです。（写真・下）



マントゥもおいしくご馳走になりましたが、感激するほどではありませんでした。

骨董店に古い鬼瓦

夕食が済んで 1 日が終わったかと思いきや、金在煥会長はまちなかにあるなじみの骨董店「家寶」に案内してくれました。店主の元赫洙さんはかなりの著名人で多忙らしく、金会長は「何度電話してもつかまらなかった。ついさっき、やっと連絡が取れた。富山さんはラッキーな人だ」。



原州 骨董品店「家寶」店頭で古鬼瓦を説明する店主・元赫洙さん（左）と金在煥会長

店主は秘蔵の古鬼瓦を3点取り出し「龍ではない。トッケビです」と言い、写真を

撮らせてくれました。感激でした。



原州 骨董品店「家寶」
鬼（トッケビ）瓦 高麗時代



原州 骨董品店「家寶」
鬼（トッケビ）瓦 新羅時代



原州 骨董品店「家寶」
鬼（トッケビ）瓦 高麗時代

金会長は「ぬらしたほうがいい色が出る」と水で洗ってくれながら、「古い瓦は水をすぐ吸う。新しい瓦は吸わないから、ツバをつけてみれば、ウソもすぐわかる」と、鷹作の見分け方を教えてくれました。

これらの鬼瓦は、「トッケビです」と韓国の専門家にいわれるから「そうですか」とうなずくものの、日本の感覚ではまさに「鬼瓦」です。その「鬼瓦」が韓国学会では「鬼ではない、龍です」とされるように

なって来たのですから、呼び名をどうするのが妥当なのか、迷ってしまいます。また、この3番目の周辺が欠けている瓦などは、「怒りの人面瓦だ」といわれれば「そうかな」と納得しそうです。

鬼瓦の世界は、既成の概念や範疇におさめきれない多種多様なものがある、実に豊かな世界なのだと痛感します。

店内に所狭しと並べられている稀有な骨董品の中にヘッテの置物もあり、ガラス箱の中で大事にされていました。



ヘッテの置物 骨董品店「家寶」

ホテルに帰りましたが、「明日は満室で泊まれない。他のホテルを世話する」といわれていましたので、どうなるのか、少し気にしていました。

夜になってユン通訳から電話が入り、「私の友人に話して、もう1日、同じ部屋で大丈夫ということになった」といいます。私はうれしくなって「どうして、そんなトッケビのような魔法が使えるのですか」と冗談を飛ばしてしまいました。1旅行者の私のために夜になっても動いてくれていることを、心から感謝しました。

韓国東北端の漁港・江陵へ

翌朝、ホテル前には中国からの団体客のバスが2台、並んでいました。それを横目にみて、5日目の鬼探しの旅に出発。待望の韓国東北部の日本海沿岸、江陵(장릉ガンヌン)方面に向かいました。

嶺東高速道をぐんぐん登ると、旗や看板

が目につきます。何かと思ったら、2018年2月の平昌(ピョンチャン)冬季オリンピックの宣伝でした。

原州から江陵へのちょうど中間点の都市・蓬坪(ボンピョン)あたりから南に向かうと、山岳地区の都市・平昌があります。ここでスキー、ジャンプ、クロスカントリー、ノルディック複合、ボブスレー、スケルトンなどが行われます。海岸都市の江陵では、各種のスケート競技です。雪も氷も豊かな一帯なのでしょう。

北朝鮮に近いところです。気のせいかもしれませんが、途中の高速道サービスエリアで韓国兵士の姿を見かけ、高速道下の河原で部隊が集まっているのを見、道路脇に銃を持った兵士が立っているところがあったりして、これまでと違う雰囲気を感じました。

江陵に近い海岸線には、長く鉄条網が張られていました。しかし、江陵の港は小さな漁船がいっぱいで、猟師たちの動きも見え、穏やかで平和な漁港に見えました。



江陵漁港の風景

最初、私はここに安いホテルをインターネット予約し、2泊する計画を立てたのでした。そのホテルが目前にありました。稀には、旅行者も泊まるのでしょうか。でも、見た目には、漁や行商などの仕事で来た人がもっぱら泊まるのだらうと感じました。

食堂は3軒くらい。一番大きな食堂に入りましたが、不漁だったため、メニューはイカ丼(W12,000)だけ。水槽で泳いでいるイカをイカソーメンのように細長く捌きご飯に載せた、コチュジャン味でした。金会長は「新鮮な海の幸をいろいろご馳走したかった」と残念そうでした。

(つづく)